令和７年度

# 目黒日本大学中学校
# 入学試験問題

# 国　語

試験時間 50分

**注意事項**

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全14ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄（らん）に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者（かんとくしゃ）に知らせてください。
- 試験終了（しゅうりょう）後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

| 受験番号 | 氏　　名 |
|---|---|
| | |

# 一

次の各問いに答えなさい。

**問1** 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

① 毎月、チョキン箱に五百円ずつ入れています。

② サイワいなことに、台風は東の海上にそれていった。

③ 北海道旅行の楽しみは動物園でシロクマを見ることです。

**問2** 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 尺八をふくにはまず口の形を意識しましょう。

② 京都のＰＲ動画には和楽器の音色が似合う。

③ よく熟れたザクロが祖母から届いた。

**問3** ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 覆水（ふくすい）□に返らず

ア 盆　イ 土　ウ 杯　エ 河

② 百聞は□見に如かず

ア 千　イ 十　ウ 百　エ 一

**問4** 次の空らんに当てはまる言葉を後から一つ選び、記号で答えなさい。

① 小さいころから一級品を見てきたため、大変目が（　　）いる。

ア 光って　イ 走って　ウ 泳いで　エ 肥えて

② 授業中、彼は先生の（　　）足をとってばかりだ。

ア かた　イ すり　ウ あげ　エ もみ

**問5** 次の文のぼうせん部のうち、名詞の種類が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『走れメロス』という物語を読んだ。

イ 毎週金曜日に約束している。

ウ 目黒駅は実は品川区にある。

エ 鈴木先生は本日お休みです。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部改変しています。）

①私たちとジェンダーとの関わりは、すでに胎児のころから始まっています。妊娠がわかり、出産までの準備を進める中で、知ろうと思えば子どもの性別を知ることができるのが今の時代です。出産前に子どもの性別を教える病院もあれば、教えない病院もあるそうです。それは、どうしてでしょうか。

ジェンダーは周りの人々の思いや願いというかたちで私たちの育ちに影響をおよぼしているのです。「それってどういうこと？」と疑問に思う人もいるでしょう。これからじっくり見ていきます。生まれてからは、出生届を提出し、この社会の一員として、足場ができることになります。出生届は、子どもが生まれた日から数えて一四日以内に、自治体に届け出て、その子の住民登録を行うことになります。出生届には、本人のことのみならず、どこに住んでいて、親はだれで、何さいで、どんな仕事をしているのか、などという父母に関するくわしい情報が記載されています。社会の一員として登録され、その育ちを保障されることになるわけですから、出生届は、私たちが社会的存在であることを示しているといえるでしょう。そして、必ずそこには性別の記入らんがあるのです。それも「男」か「女」かの、いずれかをチェックするようになっています。性別二分法のもと、女か、男かを判定されるところから、子どもの人生が始まるのです。

赤ちゃんが社会的存在であるということは、すでに人と人との関係性の中で生きている、ということを意味します。自分の家族のことでなくても、知人に赤ちゃんが生まれた、という話を聞くと、なんとなくうれしくなったり、「おめでとう！」と声をかけたくなったりしませんか？たとえばあなたが子どものころ、いつも遊んでくれていた年上のいとこが、このたび出産をした、というニュースが飛びこんできたと仮定してみてください。第一声として、あなたはどんなメッセージを送りますか？　そして、どんなことをたずねるでしょうか。

赤ちゃんは、出産によってこの世に生まれ落ちたときから、「男の子？　それとも女の子？」という質問を受けるのではないでしょうか。先に述べたように出生届には、性別のチェックが必須となっています。まずここから、自分の性別と向き合うことになるのです。それも、女か、男か、という二者択一で。人生のスタート地点で、この強固な性別二分法によって、人は男か女かいずれかの性別に自らをあてはめねばならず、「女の子、あるいは男の子である〇〇ちゃん」というように認識されます。そして、まず男であるか、女であるかのラベル付けがなされ、そのラベルにそくした人生のレールが続いていくのです。

多くの赤ちゃんは、※ジェンダー・バイアスに囲まれた環境の中で、育っていきます。大人たちからあたえられる様々なモノには、ジェンダー・バイアスの影響がみられます。赤ちゃん用品売り場に行ってみましょう。産着はどんな種類があるでしょうか。ピンク色、水色、クリーム色、とい

うような、パステル系の優しい色味のものが並んでいますね。さああなたが、この中から、年上のいとこへの出産祝いを選ぶとしたら、どんな産着を選ぶでしょうか。その際、赤ちゃんの性別を意識しますか？　性別を聞いていなくて知らなかったときには、どんなものを選ぶでしょうか。反対に、性別がわかっていた場合、男の子だったら水色、女の子だったらピンク色を選びますか？　それはどうしてでしょうか。

子ども用のいろいろな商品を見てみると、「女の子用」「男の子用」を区別して、つくられていることに気づかされるでしょう。［X］的なのは、色使いです。実際、幼児に好きな色を尋ねた調査結果によると、女の子では圧倒的にピンク色が支持され、七九・三％の女の子たちが「ピンクが好き」と回答しています。そして、ピンク色が好きだと回答した男の子は、わずか一〇・八％にすぎません。他方、男の子はどうかというと、最も高率で指示されているのは青色です。

ところで、ピンクは女の子色、青は男の子色、というステレオタイプな色分けは、いたるところで見られますね。名札のラベルの色、手提げ袋の色、くつの色等々、持ち物から身につけるものに始まり、公共施設の中でなお、男女を区別する［Y］的な色が、ピンク色と青色だといえます。これは、女の子・男の子がそれぞれその色を好む傾向があるから性別に色分けしているのか、性別に色分けがされていることによって、それぞれの性に「ふさわしい」色があると刷りこまれた結果なのか、どっちが先かはわかりません。しかし少なくとも、「男の子でピンク色が好き」ということに対する拒絶反応が人々の中にあるのではないでしょうか。

子ども服については、「男の子用」「女の子用」というカテゴリーをあえて排して、「その子」に似合うものや好きな服を選んでもらおうという理念をかかげたインターネットショップも見られるようになりました。早くから女の子向き、男の子向きというわく組みをあたえるのではなく、だれにとっても大切な、そして必要なこと、という観点で、使うものを選んだり、自由に選ばせたりしたいものです。

一九七五年に発表された「Baby X」というタイトルの有名な論文で、赤ちゃんの性別によって大人の態度が異なるということはすでに実証されています（Seavey et al., 1975）。研究者のみが様子を観察できる実験室には、ゴム製の小さなサッカーボール、ラガディ・アン人形（赤毛の女の子の抱き人形）、そしてプラスティックの輪のおもちゃが置かれています。この中に、黄色いジャンプスーツを着た生後三カ月の赤ちゃんがいて、その赤ちゃんの名前や本当の性別の情報は知らされていない被験者の大人が入室し、赤ちゃんと対面。赤ちゃんの性別を「男の子」と告げられた場合と「女の子」と告げられた場合に、どのおもちゃで赤ちゃんと遊ぶのか、抱きしめたりキスしたり微笑みかけたりといった態度をどの程度示すのかを観察しました。被験者は二一さいから四八さいの男女です。結果、おもちゃの選択は、明らかに告げられた性別と関連していました。赤ちゃんが女の子だと告げられたときには人形が選ばれることが多く、男の子だと告げられた場合には、ボールが選ばれる傾向にありました。

そしてこの実験から四〇年が経過した二〇一七年に放映されたＢＢＣの番組では、幼児に本当の性別とは異なる服を着せ、女の子は男の子に、男

の子は女の子に見えるような恰好をさせて、大人たちが幼児と遊ぶという調査④が行われました。その中でも、大人たちは男の子だと紹介された場合にはロボットや車のおもちゃやパズルをあたえました。女の子だと紹介された場合には、人形やふわふわした柔らかいおもちゃをあたえたのです。これは、被験者が女性でも男性でも同様の傾向を示しました。あとから子どもの「本当の性別」を聞いて、被験者の大人はおどろきをかくせません。性別のステレオタイプに基づいて、おもちゃを選んでいたのだと気づくのです。

近年、「脱ジェンダー」「ジェンダーレス」への指向性から、男の子が人形遊びをする、女の子が電気ドリルのおもちゃでものづくりをする、というような、想定されていたジェンダーとは異なるもう一方の性を意識したおもちゃが開発されています。でも、一つ気になるのは、人形遊びが好きな男の子向けの「男の子の人形」が用意されていることです。わざわざ「男の子の人形」がつくられているあたりに、まだジェンダーへのこだわりというか、「男の子の人形ならいいでしょ？」というニュアンスが感じられます。電気ドリルにしても、「ガールズ※DIYトイ」とわざわざ注釈めいたタイトルがついていて、ピンク色でポップなかわいさ満載のドリルで、「アクセサリーボックス」などを簡単につくれると宣伝されています。こういう状況を見ると、「脱ジェンダー」とは言えない、売り手側の弁解めいたものを感じてしまいます。

これらのおもちゃを使って、子どもたちは喜んで遊ぶかもしれないけれど、⑤根底にはジェンダーのステレオタイプの基本線がしっかりひかれていて、ジェンダーレスとは程遠く、想定される「女の子らしさ」や「男の子らしさ」をちょっと拡張してみただけなのかもしれない。おもちゃをあたえる大人の論理として、これらは男女平等のおもちゃなのかもしれないけれど、ある男の子にとっては、別に男の子の形態の人形で遊びたいわけではないかもしれません。またある女の子にとってはDIYトイじゃなくて、本物の電気ドリルとくぎやネジを使って、ものづくりをやってみたいかもしれないでしょう。大人が勝手に解釈して、これでよいと決めるのではなくて、子どもの気持ちをちゃんと聞いて、受け止めることの大切さを改めて感じます。

（堀内かおる『10代のうちに考えておきたいジェンダーの話』）

※ジェンダー・バイアス……性別に対する先入観。
※ステレオタイプ……昔ながらの考え方。
※カテゴリー……区分。
※排して……しりぞける。
※BBC……英国の国営放送のこと。
※DIY……自分の手で作ったり、修理したりすること。

**問1** ぼうせん部①「私たちとジェンダーとの関わり」とあるが、出産前後のジェンダーとの関わりについての説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　出産を祝う人々が、女の子の赤ちゃんに対し、ピンク色の産着をプレゼントとして選ぶことが多い。

イ　出産をしたお母さんは、赤ちゃんが生まれると、みんなから「おめでとう！」と声をかけてもらえる。

ウ　両親は生まれてくる赤ちゃんの性別を知るかどうか、選択することができる。

エ　生まれた赤ちゃんは生後十四日以内に性別二分法のもと、男か女かに判定される。

**問2** 空らん［X］、［Y］にあてはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　X―代表　Y―効果

イ　X―主観　Y―抽象（ちゅうしょう）

ウ　X―典型　Y―象徴（しょうちょう）

エ　X―客観　Y―具体

**問3** ぼうせん部②「ステレオタイプな色分け」とありますが、本文中で説明されているステレオタイプな色分けにあてはまるものには○、ふさわしくないものには×で答えなさい。

(1)　歩行者用の信号機は青と赤の二色で、青は「進め」、赤は「止まれ」の意味で使われている。

(2)　ＪＲ目黒駅構内のトイレの表示は、男子トイレが青字で、女子トイレは赤字で書いてある。

(3)　サッカー日本代表は、男子が「サムライブルー」、女子は「なでしこジャパン」と呼ばれている。

(4)　娘は四月生まれなので桜色の、息子は海の日の生まれなので水色のスニーカーをプレゼントした。

**問4** ぼうせん部③「この実験」と④「調査」の手段と目的として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「実験」も「調査」もどちらも大人たちに赤ちゃんの本当の性別とは逆の性別を教えたうえで遊ばせ、大人の態度がいかに性別のステレオタイプによって異なるかを確かめることを目的としたものである。

イ 「実験」も「調査」もどちらも大人たちに赤ちゃんの本当の性別を知らせずに対面させて、大人の態度がどの程度性別のステレオタイプにもとづいているのかを確かめることを目的としたものである。

ウ 「実験」も「調査」もどちらも赤ちゃんの本当の性別が分からない状態で大人に遊ばせて、赤ちゃんの性別が分かっていることが大人にとってどれくらい重要なのかを調べることを目的としたものである。

エ 「実験」も「調査」もどちらも赤ちゃんの本当の性別を教えていない状態で大人に参加してもらい、あとから本当の性別を告げることでどれだけおどろくかを調べることを目的としたものである。

**問5** ぼうせん部⑤「根底にはジェンダーのステレオタイプの基本線がしっかりひかれていて」とありますが、この考えの根拠となる事例はどのようなことですか。本文中から三十五字以内で探し、はじめとおわりの三字を答えなさい。

**問6** 次のうち、本文の説明としてふさわしいものには○、ふさわしくないものには×で答えなさい。

(1) 私たちの身の回りには、ジェンダー・バイアスの影響によってつくられたものがあふれている。

(2) 幼児たちに好きな色をたずねた結果、男の子の一番人気は青、女の子はピンクである。

(3) 女の子が人形遊びを好きなのは、大人たちによって刷りこまれたジェンダー・バイアスのせいである。

(4) 性別のステレオタイプにとらわれず、好きなもので遊ぶべきなので、「男の子用の人形」はもっと広まった方がよい。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部改変しています。）

「ご予約を変更なさいましたか？」と聞かれて彼はうろたえた。

「いえ、しなかったと思うけれど……」

「あの、これは三時半の便のご予約ですが」

ゴヨヤクという言葉は耳障りだと思いながらカウンターごしに航空券を見ると、なるほどそうなっている。

数週間前に予約を入れた時に、早く帰るつもりで早い便にしたような気もする。その後、事態が変わって、その日の午後に予定がいくつも入った。いそがしくて予約のことは忘れていた。三日前、出発に際して往復の航空券を受け取った時も確認をしなかった。いつものとおりの遅い便だと錯覚していた。

今は六時半だ。三時半の便は彼を乗せないままとっくに出てしまった。

「七時五〇分の便に空席はありませんか？」

「お待ちください」と言って、係の女性はキーボードを叩き、ディスプレイをにらんだ。

「あいにく満席となっております。空きがあれば問題はなかったのですが、明日から三連休ですのでねえ」

そう言われてはじめて、彼は空港ターミナル内の異常な混雑の理由がわかった。迂闊なことだ。

「七時五〇分と、その後にもう一便ありますが、空席待ちなさいますか？」

「ええ、お願いします。念のために明日の一便の予約を入れてくれますか」

それも空きがなかったらと心配になったが、幸い朝早い臨時便に空席があった。これで明日には必ず帰れるが、できれば今日のうちがいい。

受け取った空席待ち整理券の番号は67だった。整理券を受け取っても帰ってしまう客が何割かいるし、他社の便もあるし、四百人以上を乗せる大きな機材ならば、空席待ちで二、三十人乗れることもある。

問題は荷物だった。乗れると決まったわけではないから、カウンターでは預かってもらえない。搭乗口まで持っていかなければならないが、今日の荷物は大きかった。おまけに一つは段ボールの箱で、手を提げられない。

結局、彼はカートに荷をのせたままセキュリティー・チェックの列に並んだ。

先日の事件のせいでチェックはいつもより厳しくなっていた。
担当しているのは、いかにも不慣れで杓子定規な感じの若い女性だった。
「カートはこの先は使えません」
①そういうことを言いそうなタイプだなと思ったら、案の定そう言われた。
「空席待ちですからね、ぼくはこの荷物を搭乗口まで持っていかなければならないんですよ。手では運べないでしょう」
「でもカートはこの先では使えないんです」
「では、どうやってこれを持っていけばいいんですか？」と問い返した口調は少しきつかったかもしれない。
しばらく押し問答をしていると、上司らしい男性がやってきた。
「ああ、いいんだ。空席待ちの場合はいいの」
そこで荷物を、預けるはずのものまで、X線装置に通す。
「何かはさみのようなものが入っていませんか？」
②やれやれ。
「入っていますよ。だってこれは機内持ちこみではなく、預けるつもりの荷物なんだから」
「拝見させていただけますか？」
「どうぞ」
彼はかばんを開いて、ひげの手入れに使う小さなはさみを取り出し、相手に渡した。
「計ってよろしいですか？」
「どうぞ」
いちいち聞くまでもないだろうと思いながら、彼は担当者がはさみに物差しを当てるのを見ていた。
なぜこうも馬鹿ていねいでしかも押しつけがましい話しかたしかできないのか。
それに危険物としてこれを預けるとしたら、乗る便もきまっていないのに、いつどこで受け取ることになるのか。空席待ちのシステムと、セキュリティーのシステムの間に③論理のすき間がある。
「はい。これはお持ちこみできる範囲内です。ご協力ありがとうございました」

それから彼は七時五〇分の便の搭乗口に行き、出発を待ったが、この便には乗れなかった。
次の便の搭乗口へ移動する間に空腹感がつのってきた。六時半に空港に着けば、搭乗手続きを済ませてから夕食をとる時間があるという計算だったのに、それがくるってしまった。大きな荷を持って上の階のレストランに行っているひまはない。空席待ちというのはずっと搭乗口に張りついていないと機会を逸する。
結局のところ、次の便、つまりその日の最終便にも彼はあと四人というところで乗れなかった。
「やあ、よかったよかった。ぎりぎりだったな」とはしゃぎながら機内に向かう人々から④目をそらして、搭乗口をはなれる。
搭乗口のわきにあった公衆電話からモノレールで行けるホテルに連絡して一夜の宿を確保した。朝の六時にはまた空港に来なければならないのだから近いホテルがいい。
搭乗口の側から外に出るのが問題だった。
セキュリティー・チェックのところを逆に出るのが最も簡単なのだが、最後の便も出てしまった今、そこはシャッターが降りていた。
では到着の客と同じコースをたどるしかない。カートを押しながら通路を延々と歩いて、一階下に降りるためにはエレベーターを使い、到着ロビーに出る。
荷物は一晩コイン・ロッカーに入れておくつもりだったが、明日の朝のことを考えると出発ロビーまで運んでおいた方がいい。
またエレベーターを探して上の階に上がり、コイン・ロッカーに荷を入れて、暗証番号がプリントされた紙片を丁寧に財布にしまう。この期におよんでロッカーが開けられないなどというトラブルはまっぴらだ。
早朝の臨時便に席は取れたけれど、その後の便はすべて満席と聞かされた。乗り遅れたら後がない。
バックパック一つを背負ってモノレールに乗り、最寄りの駅で降りて、少し歩く。
ホテルのレセプションでまた問題が生じた。
クレジット・カードを提示して、回線で認証も下りたはずなのに、ホテル側は金額を書き入れてないクレジット伝票にサインしろという。
「ブランクの伝票にはサインはしません」と彼はつっぱねた。「それはどんな場合でもしてはならないことだし、客に求めてはいけないことです。あなたがたはぼくを信用していないかもしれないけれど、ぼくの方もあなたがたをそこまでは信用していない」
しばらくの押し問答のあげく、⑤ホテル側は引き下がった。

この時も、自分の口調が X かなと彼は思った。たぶん空腹のせいだ。

しかし、言葉が通じないという感じはどこから来るのだろう。この晩、彼が議論した相手は二人とも「係」だった。それぞれにマニュアルに従って行動していた。セキュリティー・チェックでは、カートはここまでという決まりのことしかあの担当者は考えていなかった。大きな荷を持って搭乗口に行かなければならないという彼の状況を理解する用意が彼女にはなかった。

言葉が働かない。頭の中にセットされた決まった台詞以外は出てこない。

ホテルでも同じことだ。レセプションの係は彼と論理的なやりとりをした結果、要求を取り下げたわけではない。うるさい客だから引き下がっただけだ。電話で当夜の予約を入れてすぐに来る一泊の客の場合は、泊まり逃げされないようブランクの伝票を取っておけというホテルの方針が今夜から変わるわけではない。

そう考えると、疲労感がつのった。

部屋にバックパックを置いて、空腹対策という次の問題を考える。

こういうことの後だから、いい加減には済ませず、自分がちゃんと満足するものを食べたい。

しかしこのホテルで食事をする気にはなれない。

先ほど、駅からホテルまでの道の途中で、何かを目にしたのだ。意識のどこかに引っかかっている、何か好ましい記憶。

ロビーまで降りるエレベーターの中で記憶が鮮明になった。あれは小さな黒板に書かれたメニューだった。

どこか、店先に置かれた黒板に、オイスターという文字があった。今の場合、牡蠣と白のワインという組合せは元気のもとになるかもしれない。

牡蠣は好きだ。

彼はその黒板を探しながら、駅の方へもどった。一度見落として行き過ぎ、ふと振り向いて見つけたのは、その黒板が駅の方を向いていたからだ。

その店はビストロと呼ばれる類の簡易レストランで、黒板には日がわりのメニューが数点書いてあって、上から二番目が「ワシントン州から空輸のオイスター」だった。

彼は店に入った。

「一〇時閉店ですけれども、よろしいですか？」

白いブラウスに黒いスカート、それに黒い長い前かけを着けたウェイトレスが彼にたずねた。

時計を見ると九時二五分。一人の夕食を終えるには充分(じゅうぶん)だろう。

中略

彼のオイスターが来た。なるほど一個二五〇円だけあって大きい。一口ではとても食べきれない。無理をして一口で食べてしまうのはもったいない。

味も濃厚(のうこう)で、みっしり中身がつまっている感じだった。さらりと軽いいかにも養殖(ようしょく)のやせた牡蠣とはまるでちがう。能登の岩牡蠣のよう。香りは少しとぼしいけれども、味と量感はそれを補ってあまりあった。

なかなかいい展開ではないかと思いながら、彼は牡蠣を食べ、白のワインを口に運んだ。ハウスワインだからお任せだがこの牡蠣には合っていた。

よく味わいながら、彼は少しずついい気分になってきた。飛行機に乗れなかった不満がじわじわと解消されてゆく。ほぼ月に一度、飛行機を使って首都に来ているのだから、たまには乗れないことがあるのもしかたがない。

この前、乗り損なったのは、一昨年の夏、台風で、乗るべき便が欠航になった時だった。

欠航で見捨てられた乗客は次の便の席に関しては何の権利もない。空席が出るのをひたすら待つしかない。たいていは航空会社が臨時便を出して積み残しの客を運ぶのだが、あの時は、９００番台の整理券を持って、一日空港の中をうろうろしてようやく夕方の便に乗ったのだった。

（池澤夏樹『きみのためのバラ』「都市生活」）

**問1** ぼうせん部①「そういうことを言いそうなタイプ」とありますが、どのようなタイプですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分に自信がない様子で、頑張ろうという気持ちが空回りしてしまうタイプ。
イ　正義感が強すぎて、自分が正しいと思ったことを口に出してしまいがちなタイプ。
ウ　あまり場数を踏んでおらず、型にはまった受け答えしかできそうにないタイプ。
エ　仕事に対する真面目さに欠け、他人を傷つける冷たい言動を平気でしそうなタイプ。

**問2** ぼうせん部②「やれやれ」とありますが、このときの「彼」の心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　聞くまでもないことを聞かれて、あきれている。
イ　見当ちがいな指摘（してき）をされて、困惑（こんわく）している。
ウ　自分のやりたいことを邪魔されて、いらだっている。
エ　仕事ができない係員のことを、あわれんでいる。

**問3** ぼうせん部③「論理のすき間」を他の言葉で言いかえた時に、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　死角　　イ　油断　　ウ　誤解　　エ　矛盾（むじゅん）

**問4** ぼうせん部④「目をそらして」とあるが、このときの「彼」の心情として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分たちの都合しか考えていない人々に対するいらだち
イ　無事に飛行機に乗れて喜んでいる人々に対するねたみ
ウ　ぎりぎりのところで飛行機に乗りおくれたことに対するくやしさ
エ　計算していた予定が狂ってしまったことに対するあせり

**問5** ぼうせん部⑤「ホテル側は引き下がった」とありますが、ホテル側が引き下がった理由を「彼」はどのように考えていますか。次の空らんに合う言葉を本文中の言葉を使って十五字程度で答えなさい。

ホテル側が［　　十五字程度　　］から。

**問6** 空らん［X］に当てはまることばを本文中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

**問7** 本文の内容の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　様々なトラブルに見舞われた「彼」は結局当日の飛行機に乗ることができず、翌日の飛行機も予約することにも失敗した。

イ　夕食に選んだレストランで大きな美味しい牡蠣を食べた「彼」は、徐々(じょじょ)に機嫌(きげん)を直して大らかな気持ちになることができた。

ウ　三連休の前日で混雑が予想される中、しっかりと計画を立てていたにも関わらず「彼」は飛行機に乗ることができなかった。

エ　融通の利かないシステムにさんざん振り回された「彼」は、人間の温かさに触れてコミュニケーションの大切さに気付いた。

**問8** あなたは「彼」をどのような人物だと評価しますか。本文の内容をふまえて、以下の条件にしたがい、あなたの考えを書きなさい。

【条件1】「彼」に対する評価を端的に述べ、その理由を「彼」の具体的な言動にもとづいて説明すること。

【条件2】「マニュアル」という言葉を必ず用いること。

以下余白